

「上智大学」

学生発の新たな文化

～浴衣で彩る国際交流～

新妻 佳祐 ● 上智大学学生局学生センター

2015年7月7日、上智大学の四谷キャンパスは、色とりどりの浴衣を身にまとった学生であふれ返っていた。約1500人が一堂に集い、鮮やかに彩られた七夕のキャンパスは、国籍や文化を超えた多様な学生の笑顔と活気で満ちているように感じられた。学生のアイデアが形となり実現した、「上智浴衣デー」での一コマである。

1 「上智浴衣デー」とは

「普通の日にとちょっと特別なことを」をコンセプトに、通常の授業日に浴衣を着用して登校する。これが「上智浴衣デー」（以後、浴衣デー）である。一見、ただのお祭りイベントに思われてしまうかもしれないが、その開催意義は「留学生に楽しく日本文化を体験してもらい、学生間の国際交流を活性化することにある。つまり、

浴衣の着用はあくまでも「きっかけ」であり、そこから生まれるコミュニケーションと異文化理解こそが、このイベントが目指す成果となる。

このため、留学生向けにさまざまな企画を用意している。本学の和室では、書道部の協力により「書道体験」を開催。また、企業協力のもと廉価で浴衣を販売し、着付けサークルが着用の補助を行う。企画の実施を通して、運営に協力する学生と留学生の交流は活性化される。さらに、「浴衣割」と称してハラルフード

の割引販売をするなど、日本人学生にとっては自国の伝統文化を啓発するだけでなく、海外の文化に触れ、相互理解を促進する絶好の機会でもある。これら企画の実現に向けては大学事務局との協働も欠かせず、在学生と教職員を含む大学全体を一つにつなぐ「きっかけ」ともなっ



本学和室で開催された「書道体験」

ている。

2 始まりは、上智大学の創立100周年



本学学長（前列中央）と
大学公式キャラクター「ソフィアンくん」も浴衣で参加

「浴衣デー」開催のきっかけは、2013年に本学が創立100周年を迎えたことにさかのぼる。記念すべきこの年を学生も主体的に盛り上げたいとして、20人の学生が「100周年学生委員会」を結成した。学生センターが支援する形で、さまざまな特別企画を推し進めてきた

中に、この「浴衣デー」があった。当時の代表学生は、「多くの人が参加しやすく、話題にしたい」という思いで浴衣の着用を企画した。浴衣デーをきっかけに、多くの上智大生に創立100周年を祝ってもらいたい」と語った。

初めて実施したこ

の年、約1200人の学生が参加し、SNS上では「浴衣デー」の情報や写真が多く取り上げられ、学生発の新たな試みは予想を超える反響となった。上智の新たな文化となることを確信した学生たちは、代表学生が兼務する課外活動団体に運営を移管し、この「ちよっと特別」な日の実現を継承している。

3 こころから生まれる、世界をつなぐ絆

すべての学部が一つのキャンパスに集結する本学は、日常的に学生が国際色豊かな環境を体感できる「多様性の凝縮の場」である。さまざまな言語や文化的背景を持つ人々が織りなす場で、相互理解を深めるきっかけとなる「浴衣デー」は、学生が発信する上智の新たな文化として、学生・教職員から永く愛されるものになってほしいと願っている。特に、入学して間もない新入生にとっては、上智の特色を肌で感じ、国際交流の第一歩を踏み出すきっかけにもなっており、開催前からSNS上では実施を楽しみにする声も多い。「浴衣デー」は今後多様な学生同士をつなぎ、豊かな学生生活を形成する一つの貴重な機会であり続けるだろう。

〔南山大学〕

降誕祭

——人間の尊厳が輝くとき——

西脇 純

●南山大学人文学部キリスト教学科教授

南山外国語専門学校から出発した南山大学が、1学部4学科（文学部英文・仏文・独文・中国文学科）からなる新制大学としてスタートしたのは1949年のことである。設立母体は、前年に財団法人南山学園の経営をカトリック名古屋教区から委譲されたカトリック男子修道会、神言修道会である。以来、さまざまな改革を経て、現在では8学部17学科、8研究科を擁する総合大学へと成長、2017年には国際教養学部（仮称・設置構想中）も設置される予定である。

このプロフィールから、南山大学の二大特徴を読み取ることができよう。一つは、当初から世界に目を向ける大学であったということ、もう一つは、キリスト教世界観に基づく教育である。

「キリスト教世界観」といえば、多義的概念であるが、

南山のいうそれは、キリスト教的人間観に軸足をおく世界理解の探求といってよいだろう。

第三代ヒルシュマイヤー学長は、小冊子『南山大学の教育理念』の中でカトリック大学共通の教育理念を次のように紹介している。「キリスト教によれば、人間は独自の尊厳を有する人格的存在として神によって創られ、神に向かうものである。その人間の完成は、自己が有限であり他者に開かれた存在であることを悟りながら行う他者との対話、交わり、すなわち愛のうちに実現される」。

本書の教育モットー「人間の尊厳のために」は、この理念の端的な表現である。このモットーを具現化するため、開学当初から宗教に関する科目が置かれている。神言修道会所属の教員が中心となり、現在は1年次必修の「宗教論」と2年次必修の「キリスト教概論」が開講されている。1995年からは、全学共通教育科目の中に選択必修の「人間の尊厳科目」が設けられ、学生は思想史、生命倫理、政治経済、民族問題など広範な分野から選択し、それら諸領域と人間の尊厳との関わりを学んでいる。

南山教育の沿革に紙幅を費やしたのは、クリスマス（イエスの降誕祭）が、キリスト教ではそもそも人間の尊厳

を祝う祭日だからであり（神が人となったことを人間性の祝福とみる）、「人間の尊厳のために」をモットーとする本学の降誕祭が、そのような南山教育のいわば一つの果実として、学生側の発案により、自主的に始まったからである。全学行事として祝われ始めたのは、開学から40年も過ぎた1989年、実に平成に入ってからのことである。きっかけは、14名の学生有志がクリスマスを学内で盛大に祝いたいと声を上げたことにある。彼らの希望を受け止めた指導司祭（チャプレン）が学内窓口となって協力を呼び掛け、開催にこぎつけた。当時の案内文書



には、ミサやクリスマス会のほか、構内に馬小屋を設け、昼休みにクリスマス・キャロルの音楽テープ（！）や、学生が事前に練習したキャロルを歌い、これを構内放送するなどの企画が列挙されている。

現在も、降誕祭実行委員会という学生有志団体が企画運営を取り仕切っている。毎年12月中旬に開催されており、今年ではや26回目を迎える。第一部の聖式は大学に隣接する神言神学院大聖堂で開催され、聖書朗読、学長メッセージのほか、管弦楽団有志、聖歌隊らによる演奏、各学生団体の代表による祈りなどが荘厳に行われる。第二部のクリスマス・パーティーはロゴスセンター（キリスト教センター）に場を移し、趣向を凝らした出し物で盛り上がる。毎年、降誕祭の最後を締めるのはキャンドルサービスである。灯されたキャンドルが照らす中、代々の先輩が伝えた祈りが唱えられる。「……私達はこれから長い道のりを歩いていきます。道のりの途中で、迷い、立ち止まり、悔やみ、歩くのをやめようと思う時があるでしょう。その時に、今日この灯火が皆様の道のりを照らし、暖めてくれる存在となりますように。また、人々の中にあつて光り輝く存在となることができますように。」先輩たちが遺した自主精神の灯が、今年も輝きを放つ。

【専修大学】

「大学創立記念日」と「大学記念日」

瀬戸口 龍一 ● 専修大学総務部次長

大学創立記念日と大学記念日の違い

専修大学には大学創立記念日と大学記念日がある。なぜ2つも記念日があるのか不思議に思う方も多いだろう。

大学創立記念日とはその言葉の通り、専修大学が創立された日を記念する日である。専修大学の前身である専修学校は、明治13年9月16日に、福沢諭吉が簿記の普及を目的に銀座に設立した簿記講習所において開校式を行った。日本で初めて法律学と経済学を体系的に教授する高等教育機関の誕生である。相馬永胤・田尻稻次郎・目賀田種太郎・駒井重格の創立者4名を含む講師陣と入学生が一緒になって、その発足を祝ったという。

一方、大学記念日は創立者である相馬永胤と田尻稻次郎の慶事に由来する。大正11年10月30日、全国各地で学

制頒布50年を記念する催事が催された。中でも東京帝国大学構内で挙行された記念祝典では、前年に摂政に就任した皇太子・裕仁（後の昭和天皇）が「教育勅語」を奉読するなど、その様子は各新聞でも大きく取り上げられたほどである。

学制頒布50年記念祝典は、明治23年10月30日に發布された「教育ニ関スル勅語」、いわゆる「教育勅語」と、明治5年に公布された日本最初の近代学校制度に関する基本法令である「学制」という明治期を代表する2つの教育関連法令を記念した祝典であった。そのため、文部省や教育関係者はこの日を盛り上げようと様々なイベントを企画する。その一つに、40年以上にわたって教育事業に従事した全国156名の功労者の表彰があった。

私立実践女学校（現実践女子大学）の初代校長を務めるなど女子教育の振興に生涯を捧げた下田歌子、東亜同文書院（現愛知大学）院長も務めた杉浦重剛といった、当時の著名な教育者たちが名を連ねる中に、専修大学からも、学長・相馬永胤と学監・田尻稻次郎の2名が選ばれたのである。

私立大学関係者から表彰されたのは相馬・田尻の両名

のみということとで本学関係者は大いに喜んだ。そこで大正14年に学則改訂を行った際に10月30日を本学記念日と定め、これ以降、休日としたのがその始まりであった。

大正期や昭和期の学則では、両記念日は同じく大学記念日とされ、区別されていなかった。創立100周年の年（昭和56年）に、初めて9月16日を大学創立記念日、10月30日を大学記念日と定めたのである。

大学記念日から大学祭へ

実は、この大学記念日は、毎年約6万人もが集まる専修大学の一大行事「鳳祭」と深い関係がある。

大正14年、本学記念日が制定され、その祝賀会が同年10月30日に開催された。当初、あくまでも記念日制定のための祝賀会と考えていた大学当局は、祝賀会のあまりの盛況ぶりに驚くとともに、学生からの要望もあり、以降、「大学記念日」の前後に大学祭を開催することを決定した。

この時期、専修大学は、創立者たちの相次ぐ逝去や甚大な被害をもたらした関東大震災といった危機を乗り越えるべく種々の施策を打ち出す。大学記念日の制定もその一つであり、大学祭の開催によって学内の一体化を図

れるのであればという強い思いもあったとされる。

その思惑通り、大学祭は年々盛り上がりを見せ、学内だけでなく、豊島園や多摩川園（昭和54年に閉園）などでも開催された。園内を仮装行列や専大踊りが練り歩く様子は多くの見物客を集めたと、当時の新聞にも書かれている。

鳳祭という現在の名称となったのは、昭和40年のことであった。鳳は校章や校歌でも使用されている専修大学の建学の精神の象徴であり、学生にもなじみやすいということとその名が採用され、現在に至っている。

大学記念日は当初、創立者の栄誉を讃えるために制定された。しかし大学祭という公認イベントの日になったことによつて、学生にとっても大切な日になったのである。



豊島園において行われた創立記念の大祝賀会（昭和6年）